

◎扇ヶ鼻分岐まで下りてきた、雨の中、牧ノ戸峠まで来た道に戻って下る。登山口の牧ノ戸峠には1:40に着いた。5時間足らずの山行、歩きやすい山でした、これで晴れていれば景色が一望できたと残念がるが、雨の山もまたよしである。

◎T・Nさんの家に帰る前に、風呂とスーパーで食材を買った。留守の間に友人のK・Nさんが来ているだろうと帰り着いた。さあ乾杯、オレはもう若いころに帰ったようにビール、日本酒、そして美味しいあて類の数々である。T・Nさんの73歳の誕生日、K・Nさん75歳が一升瓶をさげてこられた。このお二人とユースのオーナーは仲間のようである。

◎K・Nさんは3年前に亡くなった奥さんをAちゃんと呼ぶ。若いころに精神を病まれ、「人間が潰れてしまった」そらあ 大変やったよ だけど ずっと一緒に過ごした・・・」そんなすごい話を笑ってされている、すごい。

◎朝7時にK・Nさんの青いピカピカ乗用車で出発した。昨夜は飲みながら、「よし 祖母山にしよう」と話が決まった。事前に祖母山の情報はなかったが、両Nさんはベテランのガイド、登山道を修理、整備、草刈等をされている方々である。車中で日本の山登りの入山料、特に外国人への支払いの話が出た。外国では3000円とか5000円ぐらいの入山料が普通だということもあるらしい。日本は自由発言の国、「そんな区別はいけない」「国土は 誰のモノでもない」というような意見で否定されることが多い。信州も九州も山の中には外国人がわんさかいる。登山口にトイレがあり、両Nさんが、「汚れている」と二人で掃除を始めた。

◎8:15 北谷登山口を出発、風穴ルートに登る。空気が冷たい、昨日から冷えているようだ。思い出したが昨日は久住山の上では雨に打たれ風が吹き手袋が欲しい寒さだった。帰途に風呂を探し入った。趣のある風呂の建物、太い柱に梁の木造建築、床には大きな檜の湯舟が二つ並ぶ、ぬるいと熱いと書いてある。ぬるいに入るとぬるすぎる、冷えた身体にはこれはダメと熱い方に入ろうとしたが熱い、手を入れたが、「こらあ はいれん」というほど熱いがじわりじわり身体を沈めた。あとで聞くと46度だそうで1分ほどで手がしびれてきた。「江戸っ子ダイ がまん ええい がまん」なんて言いながら楽しんだ。帰ってストーブを点けたりして、肉を焼き日本酒を飲んでシラフに潜り込んだ。

◎しばらく行くと激流に丸太の橋が架かっている。「上から丸太を4本伐って ここまで運び 架け ロープで縛り 上面に角材を置き 滑り止め」「うわわ こらあ すごい作業」渡らせてもらいながら、「山の自然 雨風があり 崩れ流れ また修繕」頭が下がる。

◎「これは スズダケ 枯れている 120年で花が咲き 咲いて枯れる」見れば全山、枯れたスズダケがびっしり立っている、花は5.6年前の事らしい。再生は無いのか調べたが書かれていない。話は変わるが、我が家の観音竹にも花が咲いている、ピンクの可憐な粒状の花、これも数十年に一回のめずらしいものらしい。

◎風穴まで来た、でっかい岩に石棺のような穴が開いているが、ただの穴らしい。「ここの階段も 修繕した 登山道 階段を造ることで 水の流れを穏やかにして 土砂の流れをおさえる」「おお なるほど」である。石にはしごに木の根っこ、そんなものを掴みながら登っていく。

◎10:30 祖母山1756Mのてっぺんに来た。たくさんの顔と顔が嬉しそう。抜いたり抜かされたりの方々と記念撮影をした。

◎国見峠、三県境を、千間平を経て四つ辻、そこから地図で言う破線道で筒が岳に向かう。オットトという急な下り、また登り、人っ子ひとり居ない、鳥はいるが獣はいない。恐がりのオレだけれどここは樹があり根っこがあり安全な道、どんどん進む。樹々の葉は緑みどりです。石の上が展望台、「すごいよ まる見えよ」と言われ梯子を登ったが、「こらあ あかん こわい 降りる」と棄権した。皆さん、「すごい」と降りてきて、また破線道を降りだした。「おっとと ここを落ちたら やばいね」というところを進みどんどん下った。ガイドがなければ進めない山の中、サバイバルゲームが30ほど続いた。「おお 林道が見えた」そこから1時間ぐらいで車のところへ、風呂と買い物をすませN宅に戻った。

◎さて、長く九州にいたが帰らねば、木曜日の船の夜便で来て、水曜日の船の夜便で帰れば木曜日の仕事に間に合う。飛行機は、と聞かれていたが、明日の船の夜便で帰ることにすると決めた。「なら 明日は また 4人で 狛師山に登って 我々はそのあと草刈りをする」「我々は 別府駅まで行き レンタカーを返し バスで港まで行く」そう決めてビールに日本酒にと飲みだした。K・Nさんの奥さん仕込みの煮っころがしを出してくれた。「Aちゃんの味だ 昭和だねえ 美味しいねえ」

◎狛師山登山口は、一昨日登った九住山の登山口：牧ノ戸のすぐそばだ。青いピカピカ車とスズキのレンタカーの2台、道路横の駐車スペースに止め、9：30 登り始めた。今日は朝から快晴、エイコラ、ぽっこりした尾根道を上の方にやって来た。上からは遠くの方まで見える、「あれが〇〇山 こっちが〇〇山・・・」ほかの地域の山並みと違って、下の方は平らかな草原がずっとずっと広がり、その向こうに山が見える。下の方は巨大のカルデラ火口なのかな、そこを毎年焼き払うので、樹の無い草原がずっと続くのかな、これは雄大な景色だね。ミヤマキリシマが咲いている、「まだ満開じゃないね」「ここの草 刈ったんだよ」

◎火口の反対側に風車が4機、スキー場があり、地熱発電所がある。風車は多少風があるのに回っていない。地熱発電は地下の熱でタービンを回し発電する仕組みらしい。九州や東北に設備があり日本全部の0.2%ぐらい発電しているらしい。風車もデメリットがいくつかあり進んでいないようだ。ついでに太陽光発電もデメリットがいくつかあり進んでいないようだ。

◎1時間ですっぺんに到着。お菓子を食べ水を飲み花を愛で景色を楽しんだ。そのあと少し南に下がりそのてっぺんにも行って、すぐに下山した。3時間ほどの山行でした。

◎「さあ どこかで 食事 そのあと ユースへ」「蕎麦の店がある」まずは蕎麦屋に向かった。どこをどう走ったのか、これまた趣のある鄙びた木造の家が細い橋を渡ったところにある。屋根に石コロが乗っている、「え 大丈夫かな」と心配したが、中はなかなかの木造建築、二面が障子窓ながら紙ではなく透明ガラスがはめ込まれ横の川まわりの樹々が飛び込んでくる。オレはザルをたのんだ。大盛りもあるが、以前、腹は減ったたくさん食べたいと大盛りをたのんで、「こらあ 蕎麦ばかり たくさんあっても 美味くない」という経験からである。出てきたものはまちまちの太さ、「あれれ きれいじゃないね」と思ったがひと口含むと美味い。蕎麦通ではないが、もちもちした蕎麦を汁につけて楽しんだ。

◎そのあとユースに行き、そこで二人と別れレンタカーに乗った。

◎別府駅には4時頃到着。バスまでの30分ぶらぶら歩いたが、琴線に触れるところはなかった。

◎バスでサンフラワーターミナルへ行き、1時間ぐらいベンチに座って待ったが、たくさんの人でごった返していた。ただ船に乗って部屋に行くと10人部屋なのに3人しかいなかった。行きと同じように風呂、ビールコースで10時頃寝た。」

◎60Lのザックにすべてを積み込み電車に乗った。大阪は人だらけである。阪急茨木駅につき歩いているとミカさんに呼ばれ「仕事行ってきます」と聞いた。「え 今日は 木曜じゃないの・・・？」なんと水曜日の朝であった。

◎ホンジュラス：中南米の小国である。国土は日本の三分の一ぐらい、900万人の人口。スペイン語。

◎毎日、豆とトウモロコシばかりを食べる。女に人は一日中働かずぶらぶらしているらしい。

◎今回の旅行中、道路を横切る雉を2回も見た。山ではたまに驚き羽ばたき飛んでいく雉は何度か見たことがあるが、ひょこひょこ足早に歩く姿は初めてだ。それと30センチぐらいのタヌキらしきモノも2度道路わきで見た。こやつはゆっくり歩く感じであった。満足の行く旅でしたが、ジジイは疲れた。

- ◎5月は展覧会があり、九州旅行があり、そのあと飲み会で痛飲し、やっと身体が元気になってきて、「ぼちぼち山に登りたい」と雑用をすませ、「明日しかない 明日は 夕方の4時には降ってくる それまでに登ってしまえ」「明後日からは 梅雨の雨 あとの3日間は仕事が入っている 木曜のアトリエ教室 金曜の大池教室 土曜の代理寿永教室」夜になって慌てザックや靴を出し用意をした。
- ◎7:20 歩き始めた。こんなに早く北小松駅に来たのは初めてだ。6時7分茨木発に乗り7時14分に到着した。ホームに降りたのはオレひとりのようだ。車窓から山を見ると霧なのか雲なのかてっぺんはまるで見えなかったが、歩きだしたころにはお陽さんも出てきた。上下の雨具と傘はザックに入っているが、雨には降られたくないで早く下りようという作戦である。5時に起き5時半に出発というジジイならではの神業でもある。
- ◎8:35 涼峠到着。普段、山に行く時には、前日の河原での運動は控えている。今日の山行は昨日の夜に決めたモノなので、昼間たっぷり運動をしてしまった、この運動をしたことが今日の体力に響かないことを願いつつ、一本目は順調に登れたのでまずはひと安心。登山道を歩き始めて、「しんどくないか 順調に登れるか えんやら」体をいたわりつつゆっくり確実に登った。
- ◎一本目を登っている時、知り合いからのネット報告で、「クマが出た 登山者が襲われた」というものと、「クマには鈴 大きな音の鈴 それと笛がいい」「水の流れて ザーザー 風の ピーポー 鈴の音が 消えてはダメ まっすぐに笛を吹く」そんな話で騒いでいる。「クマなんて 怖く ないよ」なんて強がっているが、今回はソロ山行、脅されれば怖いよね、大きな音の出る鈴を持ってきた。ポシェットに常備している笛を首にぶら下げた。鈴は前に着けると大きな音がチリンチリンと響く。笛も途中で100回ぐらい吹いたかな。結果として熊には出会わなかったし、ヒト、どなたも入ってなく会わずの山行でした。
- ◎山の緑は、全山、みどり緑みどりである。もう若葉の時期を通り越してみどりが生い茂っている。お陽さんの木漏れ日の面積が小さいちいさいというぐらいに葉が茂っている。見渡しても隣の山やら沢やらが見えないぐら이다。樹に白い花が無数に咲いている、白い花びらが地面に舞い降りている、そんな白い花が次から次に咲いている、なんの樹でしょうね。
- ◎この山行、オレにとっての定点コース、今年も4回目のようだ。1月と3月の2回、ともに雪山だった。倒木があつたり枝が折れていたり、雪と風で荒れたところがいくらかあつた。大きな樹が道を塞いでいるということはないが、枝をまたぎ枝を払い進んで行く、チンコロカンコロ音を鳴らして進んで行く。
- ◎2回目の休憩を、これから急登というところで取った。水とパンを食べた。行く時に“美味しいパン”をザックに入れたはずなのにない、何度か探して諦めたことと笑いである。琵琶湖方面が霧でまっ白と思ったが、鈴鹿の山々の中腹が霧で、鈴鹿の上の方と琵琶湖の岸がかすかに見える。琵琶湖の水面と霧が同じ色調なので全部まっ白と思ってしまった。今日は空全体がうすぼんやりしている、もっと早ければより幻想的だったかも、しかし陽が照らない分涼しい風が吹き快適だ。顔の汗をぬぐうぐらいで涼しく登っている。
- ◎タンポポ調の黄色くちっさい花、紫色のこれまたちっさい花、小ぶりの野生のアジサイ、ここのツツジは樹も小さく花は朱色、所々に咲いている。この尾根道は風が強いのか樹も大きくなれず、草も地面に貼り付いているのかな。赤い種か実がいっぱい詰まったうんこが落ちている、いかなる獣なるかな。
- ◎10:20 ヤケオ到着。これはすごい、早くこれた。毎回座る石に腰掛け一本取った。そういえば積雪時でもこの石には積もってなかったという不思議。ここまでの斜面、新雪でトレースが消えて無い時には、まさにフーフーしんどい限りだった。今、登って、登山道は尾根の側面を通っている、トレースが無いと尾根の上をそのまままっすぐ登った。尾根には小さい樹々が所々にあるが、それらが見えなかったということは、1M ぐらいの積雪があつたのかもしれない。
- ◎11:10 釈迦岳を通過、4時間足らずの登りだった。登りが3時間を超えとしんどいねえ。ガサゴソ、けったいな鳥、ハトぐらいの大きさ、イカルかもしれない。
- ◎比良駅に着き、電車に乗ってしばらくすると雨が降り出した。山で降られなくてよかった。3時過ぎ帰宅。

飛驒国猿神止生贄語 26-8<ひだのくにの さるかみの いけにへを とどむる こと>

◎この話は前にも読んだと思いながらも面白いのでまた読んだ。ひとつ前の 26-7 同様、猿神退治をしてその地に住み着き、ハッピーエンドの話である。

◎26-7 と 26-8 はよく似た話である。

26-7 主人公は、美作国に東北からやって来た、犬山（犬使う獵師）獯猛で物おじしない男。

26-8 主人公は、飛驒国の山奥に入り込み道に迷った仏道修行の僧。

話はともに、猿神の人身御供にあう娘一家のはなし。

猿神：滋賀県日吉神社が有名：

猿は神の使いとして、山の神として、尊ばれた。

猿はみずからを神といい偽り生贄を求めた。ヒトを喰う。山岳信仰。自然信仰。

人身御供：アニミズム（すべてのものに神や霊が宿る）地域にみられる。最上級の奉仕。

九頭竜川の暴れるのを治めるために、竜に娘を捧げた。

人の代わりに 饅頭・人物像（埴輪・兵馬俑）などがある。

◎道に迷った僧が、不思議な地域には行っていくと、人々から歓待を受ける。「うちに来てくれ」「いや うちに」ということでとある翁のうちに招き入れられた。男女の使用人がたくさんいてみな歓待してくれた。「まずは食事を」魚や鳥が見事に料理してあるのを見て箸を着けずに見ていると、「なぜ 召しあがらない」「子どものころから食べたことがない」「お召し上がりください わたしの可愛い娘をあなたの妻に もうあなたはどこにも 行けませんので 髪も伸ばしてなさい」

僧は仏がいかに思いかと思いつつも、魚や鳥を食べ、夜には二十歳ほどに美しい、着飾った娘を差し出され、僧は言う甲斐なく接してしまった。

こうして夫婦になり、その楽しさ、着たいもの、食べたいものが以前と比べモノのならず、お互いに愛し合い僧は烏帽子姿のりっぱに太ったご仁になっていった。いつしか八ヶ月が経つ。この家の主人は、「男は肥えているのがいい たくさん食べなさい」というが、妻の顔色がだんだん悪くなり悲しげである。元僧の男は、「なにか 怪しい」と思いつつも妻も他の人も何も言わない。何度も何度も尋ねたうえで妻は、「あなたがこの地に来た時 うちへ いやうちへ と言ったのは この地の神様が 人の生贄を 食べるのです」「あなたを この家に来て欲しい といったのは あなたを生贄として 差し出すためです 生贄がいない時は 子どもを差し出さなければならないのです」「あなたを差し出せません 私が生贄になります」と聞かされ男は、「いや大丈夫 任せてください」という。男は妻に鉄の刀を探してこさせ丁寧に研いだ。

◎26-7 美作国に東北からやって来たこの男、犬山といい多くの犬を飼い、山に行くと犬に鹿や猪を食い殺させていた。しばらく留まっていた、生贄の親の家に行った。この地では、毎年一度のお祭りに生贄を供える慣わしがあり、十六、七の娘にあたってしまった。犬山この家に行き、中を覗くと色白でかわいらしく髪も長くとても田舎人といえない上品さ、それが悲しみ泣き崩れていた。犬山は親に会い、「むすめさんは どうせ死ぬ人なら わしに下さらぬか そのかわり わたしが人身御供の 代わりになりましょう」東国人の犬山はその娘と結ばれ暮らし始め、しだいに離れがたい間柄になっていった。犬山は、猿を捕らえて飼い犬に、猿を襲う訓練をしていった。

◎二つの話、二人の男がそれぞれ人身御供になり、いざとなった時点で猿どもを懲らしめた。ハッピーエンド。

美作国神依狛師謀止生贄語 26-7<みまさかのくに のかみ れふしの はかりごとに よりて いけにへをとどむること>

◎前回同様、猿神の話をもう一コマ。猿退治の面白い話、演劇にもなりそうなストーリー、これは捨て置けない。

◎東国人の犬山は妻に、「わしは お前様の身代わりに 死ぬつもりです 死は前世の因縁故いたしかたないことながら わかれるのは悲しいことですな」

さて当日、神主をはじめ多くの人を迎えにやって来た。新しい長櫃を持ってきた。長櫃を寝所に運び込み、娘を中に入れたように見せかけ、男は狩衣と袴だけを着、刀を身に引き付け長櫃に入り、二匹の犬を左右のわきに臥せさせた。

鉾、櫛、鈴、鏡を持った人々がたくさんで進んだ。

娘は夫が身代わりになったことを気の毒に思った。

親は、この先どの道死ぬにしても、こうするしかないと思った。

◎生贄を御社に持って行き祝詞を唱え、玉垣の扉を開き、長櫃をゆわえた紐を切って中に差し入れ出て行った。宮司たちは外に居並んだ。

男が長櫃をほんのちょっとこじ開け外を覗くと、身の丈七、八尺ほどの猿が上座に座っている。歯は白く、顔と尻は赤い、左右にそれぞれ百匹ほどの猿が座っている。板の上には大きな刀、酢塩、酒塩などの調味料が備えてある。人が鹿などを料理して食べるようだ。

しばらくして上座の大猿が長櫃を開ける。男はやにわに飛び出し犬に、「食いつけ それぞれ」とけしかると犬は大猿を食い殺してしまった。男は氷のような刀を抜き、首領猿を捕らえまな板の上に引き伏せ、首に刀を差し当て、「貴様が人を殺して喰う時こうするのだな そっ首叩ききって 犬の餌にしてやる」猿は顔を真っ赤にして目をしばたたき、白い歯をむき出し涙を流し手をすり合わせる。男は、「おまえは長い年月 多くの人の子喰った代わりに たった今殺してやる 貴様が神なら おれを殺してみよ」

◎そのとき、一人の神主に神が乗り移り、「われは今日より 未来永劫 生贄を求めず この男に危害を加えることもない 生贄や その親族の罪を 責め罰してはならぬ 許してくれ」男に神様がこうおっしゃる、男は刀を引き、「今後こんなことをするな」と猿どもに言い、猿は山に逃げ帰った。

それ以後、生贄を立てることもなく国内は平穏を保った。男は家に帰り、この女と末永く暮らした。父母は婿に対して口を極めて感謝した。二度とこの家には恐ろしいことが起こらなかった。

◎26-8：飛驒の国に迷い込んだ僧：その当日になると、この男に沐浴させ、衣装をきちんと着せ、髪の毛をきれいになでつけ・・・男は舅と一緒に馬に乗って出かけたが、妻は泣き伏した。男が行き着くと山の中に大きな祠がある。ご馳走が供えられ多くの人居並んでいた。男に食べ物を勧める、人々も喰い舞い、それが終わると、男を裸にして、「動くな 口をきくな」と言って俎の上に寝かせて、玉垣の中に据え扉を閉ざして皆が帰っていった。

やがて、祠の扉がギイーと開く音を聞いたとたん男は肝が冷えた。人間ほどもある猿が現れ、キャッと鳴く。もう一匹の銀を並べたような歯のモノが現れるが、これも猿だとわかると男は気が楽になった。一匹の猿が刀を取って生贄に斬りかかろうとする時、男は股に挟んだ刀を取って立ち上がり猿に向かって走りかかり、のしかかり、「貴様は神か」というと猿は手をすり合わせて拝む。ほかの猿どもはこれを見て一匹残らず逃げ去り木の上で騒いだ。

男は猿どもを縛り付け、「今日から事情も分からぬ人に祟ったり 良からぬことをしようものなら その時は貴様らをぶち殺してやるぞ」と言って祠を順番に火をつけて回った。生贄の男はこの里の長者となり、人々を手足のように使い、かの妻と睦まじく暮らした。

- ◎7 時に阪急茨木駅で、美香・八尋のお二人を乗せ出発した。昨日一昨日ぐらいから梅雨の雨が中断か、真夏日がやってきている。“なつび・まなつび”という言葉は最近使われだしたのか、若いころは聞いたことがないような気がするが、25 度以上、30 度以上、35 度以上なんて区別があるらしいが定かなことは知らない。昨日はアトリエの温度計が 33 度で蒸し暑い。この温度の時に昼間河原に走りに行き、2 時間ぐらいで帰ってくると、身体じゅうから汗が出て、冷感タオルで拭きとるもジワリ疲労感の伴った火照りがなかなか取れない。そんなわけで昨夜は寝苦しかった、寝不足かな、と思いながらも車を走らせた。
- ◎茨木 IC から京都東 IC、そこから湖西道路に入り進んでいるといつものように比叡山を超えたあたりから渋滞の兆しが見えてきたが、「ま これぐらいなら たいしたことは ないかもね」後ろからサイレンが聞こえ赤い車が走ってきた。「ごめんやっしゃ ゴメン」とすり抜けていったと思うと、また今度は消防車が突っ込んできた、「おい どけ こら どけ」という迫力である。
- ◎9：30 歩き始めた。今日はここの駐車場に車が 10 台ぐらい止まっている。10 日前に北小松から入った時は熊にも人にも会わなかったと笑っている。「今日は 人が多そう 熊鈴も要らない か」
- ◎10：10 青ガレの下に着いた、ふ～ふ～である、寝不足がきているなど、凍らせたゼリー、バナナ、水を飲んだ。夏はゼリーを冷凍庫に入れ出発する時にザックに入れる、参加人数分を入れる。一本目二本目ぐらいの時に多少融けだしたそれを食べると生き返ったようになる、重いがそれは我慢。果物も美味い。女性の方々は冷えた果物をカットして食べやすいように差し出してくれる、夏のふ～ふ～の時にはこれまた最高である。
- ◎長そで T シャツにチョッキを着ているが汗で全身濡れ気味というぐらいに汗が出ている。ペラペラの半そでシャツならもっと涼しいが、山は鋭い樹の枝がありガリガリの岩がある、長袖に長ズボンは欠かせない。余談だが、最近帽子も必需品になってきた。髪の毛が無くなり木の枝があたると、頭皮が切れる傷つく。髪がふさふさ時代には考えられなかった、髪の毛はなかなかの防寒防護のしかも格好良さの必需品である、若くして失くした方の無念さがよくわかる。
- ◎空は青空なんだが、なんだか鈍く薄暗い青である。このコース、今の季節は樹々の葉っぱが生い茂り直射日光はほとんどない、下界は猛暑と思われるが、時には涼しい風も吹く。先日の北小松コースでも見た“コアジサイ”あちこちに可憐に咲いている。
- ◎金クソ峠からコヤマノ岳の間には杉の大木が多い、「お かつこうがいい 樹齢 300 年以上かな」杉の木は好きじゃない、なんて言っているが京都の北側の杉の大木はなかなかのものである。根元のあたりが象の身体ぐらいの大きさのモノ、何本も分かれて立っているモノ、妙に曲がって伸びたモノ、菊太郎（馬鹿野郎とオヤジの怒声が・・）なんてひとつ一つに名前を付けたいねえ。
- ◎クマハギに会った杉が 3 本並んでいる。まだ 2,3 か月ぐらい前のかと思われる。雪のころ、愛宕のツツジ尾根で樹液が垂れているクマハギが横に在った。熊君も活躍しているんだ。
- ◎12 時ころ腹が減ったと途中で弁当を広げた。12 時半ごろコヤマノ岳にやって来たが、「このペースでは てっぺんまで行って 北比良を通して帰ると 暗くなる 今日はここまでにしましょう」「ここで コヤマノで 30 分ほど 楽しみましょう」3 月まだこのあたりまばらに雪が残っている時にやって来た、その時はみなさんぐんぐん歩き、12 時ころてっぺんで弁当を広げた。今日は夏日が続く寝苦しい夜で寝不足気味か、オレも含め体調が悪そう、足が遅い、グイグイ登れない。
- ◎金クソ峠から斜面を慎重に下った。よいしょこらしょ、気をつけて、青ガレまで来てますます慎重に、「おお つかれた しんどい」横の斜面で一本取った。日照りが無いのありがたいが、シャツもズボンも汗で濡れている、夏の山は全身の着替えを積んでこななければと反省である。
- ◎車のところまで帰り、濡れたシートで身体を拭くと気持ちがいい、シャツを着替えた。「風呂に 入りたい」ということで麓の温泉へ。「オレは 着替えもない 運転中 眠くなる」30 ほど待って車を走らせた。お二人は後ろで爆睡である。まだ明るいうちの 7 時ころ帰宅。風呂、ビール、である。

近江国篠原墓穴男語 28-44<あふみのくに しのはらの はかあなに いる をのこの こと>

◎この話を読んでいて、「こんなこと よくある話 誤解の誤解 疑心暗鬼 あれれ儲かった・・・」

それとこういう古文を、今昔物語をはじめ古事記などをぼそぼそ読むうちに、現代語訳でなきゃ楽しめないとか豪語していたが、原文の活字になったものを読んで、「あれれ 読める 多少楽しめるじゃないのかな」なんて変化にありがたく思っている。こんなこんな、専門家や先達にとって、「あったりまえじゃ」と笑われそうだが、ジジイのちょっとした進歩もいいじゃないですか。

◎旅をしている男が、急な雨に会いあまやどり先を探していると、墓穴があったのでそこに潜り込み日が暮れ暗くなってきた。今夜はここで泊まろうと奥に入りうとうとしているとなにモノかが入ってきた。「まさか 鬼か ここは鬼の住処か 殺され食われる」恐怖のまま逃げるすべもなく隅っこで小さくなっていた。真っ暗の中、そのモノがすぐ近くまでやって来てどさっと何かを置き、蓑を脱ぎ、腰を下ろす気配がした。男は、「これは人か やはり鬼か・・・」とじっと身を殺していると人の声で、「ここはもしや 神様の住処でしょうか おいでになられたら これをお召し上がりください」「雨が降り 夜がふけてきたので 今夜だけと思って ここに入ったものでございます」お供えのように何かを置いた。

男はこれを聞き安心をして、置いたものを手探りすると餅が三枚ある。男も疲れ空腹だったので、餅を取ってこっそりいただき食べた。

あとから来たモノが手探りで餅を探したがないので、「本当に鬼が喰ったのでは」と驚き慌て何も手にせず脱兎のごとく走り去った。

オレが餅を喰ったので、逃げてしまった、上手く喰ったものだ。捨てていったものを探ると、なにかのつまった袋と蓑が残されている。「これは儲かった いただきだ 逃げたやつが様子を見に戻るかも知れない」男は夜の明けぬうちに袋を背負い蓑を持って墓を出て行った。

遠く人里離れた山の中で袋を開けて見ると絹や綿がいっぱい入っていた。

男は、「訳あって 天が 下さったものだ ありがたく いただこう」と消えていった。

◎近江国：篠原：滋賀県の湖東、現在の野洲市あたりか。このあたりには古墳群がある。平家終焉の地と言われ、壇ノ浦の戦いで敗れた平忠盛が鎌倉から京都に送還中、篠原で首を斬られた。

◎墓の穴、雨露をしのげ、奥が深いとなると、横穴式古墳の墳墓しかないと想像したが、多分そうだろうという先生方の指摘に納得。古墳群がいつの時代かわからないが、この物語の書かれたころには盗掘にあい、みごと石組のみが残っていたのかもしれない。

アウトドアを趣味としているオレにとって、雨は降ってきた夕方に墓穴と言えどもしっかりした石組みの横穴があれば、「ここで 寝よう 墓穴というのは多少きみ悪いが 何百年前の死人の墓と思えば・・・」てなことで喜んで中に入って一泊の準備をしたらどう。もちろん今の時代、携帯ライトは持っているので煌々と明るいとはまではいかないが、充分に明るい。もちろんコンロもボンベもコッフェルも食料も持っているよ。

まして、「鬼の住処カモ」とか、「妖怪 怪物 魑魅魍魎」なんて怖くないもんねエ。

◎穴の中、だんだん暗くなっていく、「ひょっとして 鬼の住処・・・」そんな疑心暗鬼の主人公、藤山寛美が演じればと、ふと子ども時代に腹を抱えて笑っていた感触が蘇る。怖いと思っている時に、なにかが穴に入ってくる、自分は穴の奥なので逃げ場がない、恐怖のどん底、ドスンとかシャワシャワという音、「どうぞお助けを」と無言で念じるひきつった顔、喜劇ではこの引きつりが最高の見せ場、寛美なら演じたらと思う。

供えられた餅を喰ってしまうのも新喜劇風。

供えた餅が無くなったのを発見した男の絶叫風驚きのさま、これまた面白い。

◎いつもの安威川に来ている。午後から仕事があったので遅くなって今夕方の5時半だ、と言っても夏至（2025年6月21日）が過ぎて一週間ぐらい、まだまだ明るい、7時半ぐらいまでは明るいだろう。最近集会場の教室が週3コマになった。今週は木・金・土と3日連続した。昔は、「人に教えるなんて ばっかばかしい」なんて思っていたが、今はそれなりに楽しい。人と会える、話せる、自分のことが伝えられる、というわけだ。

◎夏至：調べると、一年で日照時間が一番長い日だそうで、6月21日が多いが一日前後にずれる年もあるそうだ。日照時間ということで冬至と比べ5時間ぐらい長いそうである。山に登るときにはこの5時間は大きい。明るいうちに下山しなくてはいけないとなると、「3時ころに下り始めりゃいい」と昼過ぎには下り始めなきゃ」おおいに余裕に差が出てくる。

◎河原での運動、ストレッチを終えて今から帰る。「ストレッチなんて 一丁前のことを言って」と笑われるがこの10年真面目にこなしている。「河原を走る」これはもう30年近く続けている、これを続けているおかげで、「お前は 元気だ」と仲間から言われる。オレの元気はこの毎日の河原から来ているはずと思い込んでいる。ストレッチはね、60過ぎにバドミントンを習い始め、その準備体操の時に教わったことを続けている。「身体が 固いね」これは若いころから言われていた。親も兄弟も運動音痴ばかりで、運動の話などでなかった。ただ山を見て、「あそこを歩きたいな」という願望は二十歳ごろからあった、近所の山を見てあのとっぺんを歩きたいと思ったが、「どこから入る どこを歩く どうして帰る」と考えると勝手には足が動かなかった。まして、信州のギザギザの山など思いもつかなかった。ストレッチに話しは戻すが、3年ぐらい前の雪山で、2メートルぐらいゴソリとづり落ちた時、背中のだこかがづれたのか、なかなか妙な引きつりが治らない、「これだけ 身体を動かし ストレッチ しているのになあ」と不思議だった。娘から、「背中が 曲がってるよ 首が垂れてるよ」と言われその時はそっくり返るのだが、何度も言われる、年中言われる。ネットで、「首を伸ばす運動」なんて調べ実行するも、どうも治っていないみたい、「こらあ いよいよ 背中が曲がった 老人かな」と悲観していた。「ええい 手を回してみよう」水泳のように前にぶんぶん、バック泳ぎのように後ろにぶんぶん、右へ左へ大きくぶんぶん回し、前へ後へ大きく回し、天に突き刺せもうひとつ天に突き刺せ、両手をぶんぶん回すようにしている。これは効いているのかな。

◎もうこの歳になって、若いころの話もないもんだが、高校大学と運動に励んでいた知り合いの連中のほとんどが、身体の故障で苦しんでいる。二十歳前後に過酷な運動を10年も続けると、腰が膝がと皆さん苦しそうだ。それに比べ、運動をしていなかった連中が中年を過ぎ、「身体を動かすのが面白い 今 週 3回やっている」と言う連中が澆刺でもないが多少元気に活躍している。

◎オレのような運動音痴、感の鈍いモノがえらそうに言うのもなんですが、「ちとハードな運動を 週 3回ぐらい 続けると 体調はいいですよ」「チンたらはアカンよ」「ながらも あかんよ」オレのまわりでね、かる～ジョギング、テニス、卓球、バドミントン、これらを週3回ぐらいやっている方々は、ジジババになってもなかなか元気です。

ジョギング、早足ウォーキング、これは運動の定番、悪いわけがない。

テニス、卓球、バドミントン、これらは玉遊びだけれど、動くうごく、はあ～はあ～の連続で終われば尻もちをつきたくなる運動かな。これらをやっているジジババ連も元気だ。ベンチに座って観戦ばかりではいけませんぞ。

◎河原でストレッチをするベンチの横を見上げると鉄道用の橋があり、時々貨物列車が通る。幼少時代から JR 吹田駅から岸部駅にかけてでっかい貨物列車操車場があった。車窓から見てみると、少し小高い部分に車列を止め、一台また一台切り離していくと A 車は 3 番レールを下る、B 社は 5 番レールを下る、坂の途中でレールのポイントを切り替える鉄道員が立っていた、彼らがポイントを切り替えていた。15 歳前後のオレにとってそれらの作業は興味津々だった。流れ下った貨物車は、それぞれ行先なりを決め、またまた隊列を組み、長い隊列になって全国に走っていく姿を想像する。

現代のコンテナ船のようにでっかいクレーンが、荷をあっちへこっちへと振り分ける技術がなかったからなのか、貨物列車はクレーン方式が難しいのか知らないが、貨物車一台一台振り分けていくのは邪魔くさい作業だろうね。より近代的なシステムはできているのかな。貨物列車もコンテナの箱をポコポコ乗せて行くだけなら、荷の振り分けもクレーンでできるかもしれない。物流のことは無知だが、船や列車は、大量の荷を同時に同じ場所に運ぶときには便利だが、これは何時にここへ、これは何時にあっちへ、なんてわがままを言われると AI 君も爆発しそう。

話はとんだが、その橋の上をゴロゴロちんたら、スピードを落として貨物列車が行き交うではなく単線なので一方通行である。コンテナがほとんどだが、タンクもあれば、木材や鉄材を積んだものもある。安威川の現地点より 5 キロほど上流に東海道線のガードがあり、明るい時間帯でも貨物列車がフルスピードで走っているのを見る。東海道線のレールは貨物列車も通るようだ。機関車はもちろん電気機関車である。EF210: 桃太郎と書かれた電気機関車をよく見る。M250: 日本では 130 キロ : 時速が早そうだ。

◎びっくりしたのがね、「梅雨が明けました」とラジオのニュースで聞かされた。「え ほんまかいな」である。

「梅雨が明けるのは 7 月 20 日ぐらいと決まっている」幼少時代からよく聞かされた。この 20 日の話は関西地方の話だろうけど、長年生きてきておおよそそのようだった。梅雨なのに雨が降らない、しとしと雨じゃなく豪雨が降った、こんな話が途中でよく聞いたが、6 月下旬から 7 月下旬というのが相場だった。「まだ夏至が終わって何日かだぜ」騙されたと思ったがどうも本当のようである。

◎「山に登るなら 天気図が読めないと ダメですよ」どこかのスナックでどこかの大学の先生がそう言っていた。地図の等高線などは多少読めるようになってきたが、天気図はまるで分らない。深夜ラジオで緯度経度の気圧、気温を順次読み上げていくアナウンサーの声を聞いたことはあるが、その点をつないで天気図を作るマニヤがいた。山のテントの中でそれをしている方がいると聞いた。オレにはとてもできない。梅雨というのは季節の現象で、その季節が終わってから、「今年の梅雨は 〇〇日から 〇〇日まで」と決めると聞いたことがある。いつ入った、いつ終わった、は聞きたがりの人のためのリップサービスかもしれない。

◎大発見とは大げさだけど。もうちょっとで河川敷が終わり階段を上って土手の上に上がるというところ、ふと左下を見ると目があつた、彼もオレを先に見つけて躊躇している。「お ヘビ びっくりするじゃない シマヘビ君か いささか大きい 色は サバの色だねえ 青っぽい銀色」目がこちらを見ている、「なに奴 無視して進むにはでかい 下がろうか」という状態、足をフラリそちらにむけると、「ええい 邪魔くさい奴め」とゆっくり草むらに下がっていった。今年になって 3 度目の蛇である。たしかにヘビはたった 3 度だが、鳥は今日だけで 40, 50 羽は見ているかな。そういや昨日、すっぽんを見た。すっぽん君オレが近づき大慌てで穴に逃げ込もうとしたがその穴は雨水抜きのパイプ、すっぽん君の径よりパイプの径が小さい、両足をばたつかせ回転するもそらあ無理だぜ。足で引き出し、「こっちこっち」と少しずつ蹴って水の流れの方に落としてやった。亀はよく見る、水の中ですいすい岩の上で甲羅干し、すっぽんは初めて見た。